別書誌
合6 綴

393
756

事故本
書き込み多数
欠頁 第58輯の内
P.5.6.11.12.45~最後

1997.7.9

O 複写

始

393-756
1200501462639

井上紅梅著

上海の貧民相

東亞研究講座
第五十八輯

東亞研究會

上海の貧民相

（目　次）

貧富の懸隔……一
廢船草棚生活……四
農民の窮狀……一五
裏店生活……二九
インテリの間借生活……四三

393-756

上海の貧民相

貧富の懸隔

井上紅梅著

上海には支那全國の富民が集つてると同時に、支那全國の貧民も集つてゐる。これは今初まつたことではない。開港の始めから貧富の懸隔が激しかつた。阿片戰爭を契機として近代列强資本主義の足場となり、經濟侵略が行はるゝ前提として不平等條約が結ばれ、白人保護の治外法權は、意外にも副次作用を喚び起し、革命政治家を保護すると共に、內亂があるたんびに避難民を保護した。その避難民の中には富者もあり、貧者もあつた。

富者は初め戰亂の歇むのを待つてゐたが、それが長髮賊の亂の如きは十數年も續いたので、遂に此處に腰を卸して商賣を初めた。現在支那固有の手工業品、農產品、半加工品、藥種、金銀細工商。舊式金融業錢莊、質商、官醬商、酒棧、毛皮商などは多くはそう云ふ經歷を持つて

ゐる店である。そうして現在一流處の富者は、外人の手先となつて働いた買辦、或は大官の舊手などで、彼等は次第に新式の商工會社、銀行などを起した。

勞働の需要は最初、波止場人足、荷物運搬夫、車夫、掃除夫、土工などであつたが、賃銀は支那內地と比べると遙に好く、何年間働くうちには相當の蓄積も出來て、鄉里に歸つて安い田地を買ひ嫁を迎へる者もあつたが、大多數は都市的享樂に馴染み、阿片を吸飲して貧乏のドン底に墮ちた。大體上海苦力の供給地江北（カッポー）は支那にも稀れなる不毛地で十年に一作當ればいいとしてある位だから、一旦上海に出て來た農民に歸心少く、上海の北部の河筋に貧民部落を形成し永久に此處に居住する者が多かつた。

開港の初め外人は、此富者と貧者を手なづけるためにどれほど苦心したらう。先づ富者に對しては商品の賣込みに專念したが、第一商習慣が違ふ上に貨幣や手形が區々で、商賣の掛引が強く、問屋は暗默の間に非賣同盟を形成して、相手方の賣急ぎを待つてゐる始末、そんなことで外人もたび〳〵手を燒いたので、どこの商館でも買辦を重用するやうになつた。

買辦の起原は阿片戰爭の時、寧波邊で捕虜を獲た英國軍艦は、捕虜の中から、十六七歳の少年を撰り出し、ボーイに使つて之れに言葉を敎へ通譯をさせたが、上海の開港と共に買物などを命じ、まもなく商館や銀行が設立さるゝに至つて、彼は徒弟を養成し、商取引の間に立てた。爾來外人は此買辦を橋渡しにして製品を賣り原料を仕入れ、遂に企業借款や政治借款を起すに至つた。

併し仲介的性質を帶びる買辦には種々の弊害を生じ、これを廢した會社も少くはなかつたが、金錢の授受と苦力の雇入に就ては今も猶ほ用ゐざるを得ない。金錢は現銀を用ゆるゆゑ見分けが面倒であるし、支那手形は錢莊の事情に通じないと、不渡手形を受ける虞れがあるので、一定の保證金を積ませて、買辦に全責任を負はせる方が便利である。又苦力には一種のギルド的習慣規約があつて、その道の親分でなければ操縱し難いから、之も買辦に全責任を負はせる方が便利である。そこで銀行と船會社の如きものは、支那商工機關が悉く歐米風に改善されない限りは買辦が必要である。現在はその過渡期で貨幣制度や手形法を改正し、新式の勞働組合なども結成されつゝあるが、一地方だけでは效能が薄く、輙もすると逆戻りになりそうな有樣である。

上海の富人は以前は大官の舊手などもあつたが、現在其大多數は買辨上りである。買辨はかうして重厚なる外國資本を利用して、一方には高利を取つて自國政府の金を搾取し、一方には賃金の上前をハネて最下層の貧民から殘酷な搾取をしてゐるのである。上海の貧富の懸隔の甚だしいのは偶然でない。

併し其原動力は列强の資本主義にあり、九十四年前に餌に侵入して來たのに、彼等は殆んど覺醒せず、そうして覺醒した頃にはもはや手の着けやうもなく、藻掻けば藻掻くほど深淵に陷るやうな現在の狀態である。

地方の戰亂、農村荒廢、商人の投機的買占め、廉賣(傾銷)、軍閥の苛稅、土地兼併などで、農民は耕作を棄てゝ鄉村から續々都市に集つて來る。併し都市には彼等を收容するほどに近代工業が發達してゐない。手工業は廉價な外國器械製品に押されて日々に衰退する。そう云ふ過渡の混亂に際して上海の如き特種の大都市では三段の貧民階級が出現した。

廢船草棚生活

欠

しであつて、共産軍は第一に之れを禁じ「戰友のポケトさぐるな」と標語を作つた位である。併し之れを以て彼等の殘忍性を說くのは當らない。兵士も矢張り最低の貧民だ。彼等の平生の生活が此處にも現はれたのである。茅盾の寫實小說に、「質屋の前」と云ふのがある。貧農がたつた一つ殘して置いた南瓜までも食つて仕舞つた時、女房は亭主に囑んで町の質屋に行つて貰ふ。共質草の中に、藍染の瓦斯織棉衣の上下がある。女房は之れを見て、十三歲で死んだあの惣領娘の遺骸から剝ぎ取つたものだ、と涙ぐむところに、わざ〳〵割註がしてある。

「彼等の田舍の習慣では、死人が闊艤樣に會見する時、裸でゐてはいけないので、極貧の者は納棺の時、死者に成可く見好い着物を着せ、二三日經つて法事が濟むと、衣類を剝ぎ取つて埋葬する。かう云ふことはよく〳〵困つた場合でなければやらぬ」

廢船の者や草棚の者はいつも〳〵、よく〳〵困つた場合に居るものである。薄氣昧が惡いとか、殘忍だとか、そんなことを一々考へてゐる暇もない、彼等は金になる物は何でも拾はなければならぬほど行き詰つてゐる。之れは鐵砲玉のヒユウ〳〵と鳴響く中にケースを拾ひに出る人の頭にある意識と同じことで、認識不足の日本人は、彼等の物質慾の旺盛なることに驚いて

欠

ゐるが、そう云ふ物質慾を出さなければならぬほど貧乏してゐる彼等の環境を考へてみない。これは今初まつたことぢやない。孔孟の昔から支那農民は日本人の夢想も及ばぬ貧苦の中に呻吟してゐる。

「君子は義に喩る。小人は利に喩る」――論語「義に喩る」は貴族か、インテリゲンチヤで、「利に喩る」は貧農か農奴で、いづれもセツパ詰つた者である。そこには孔子は一點の同情もしてゐない。

「小人恥ぢず、仁ならず、長れず、義ならず、利を見ざれば勸まず、威せざれば懲りず」――易經　灰吹屋の雇賃親爺が算盤に肘を突いて小僧をコキ使ふやうな口振である。

「婦女子と小人は養ひ難し」――論語

壓迫者が被壓迫者に對して己れと同樣の心ならしめやうとするのが第一無理である。だから孔孟は先づ統治者の心を改善するつもりであつたが、道德倫理といふものは云ひ易くして行ひ難く、孔孟の敎を學ぶ者は、その敎へを逆用して之れを貧民にのみ强要した。そうして己れは上下の分に立籠つて物慾を縱にした。

「君子無ければ野人を治する莫し。野人無ければ君子を養ふ莫し」――孟子

君子は懷手して野人を虐使するのが當然になつてゐた。其結果、野人は糊口に窮し、子を賣り妻を賣り、乞食になる者もあれば山賊になる者もある。廢船に住む者もあれば草棚に住む者もあると云ふわけである。

朝、闇いうちから「トーキーチヤ」と叫ぶ哀れな聲が路次から路次へと響き渡る。之れは馬桶屋のサヽラの音が伴奏する朝の音樂である。日本でラヂオ體操を聽くやうに每朝眠を醒すと此聲が聞える。殘飯、古油、煮物の屑を裏口に出して置くと彼等は先を爭つて拾つてゆく。之れは豕の餌になると云ふ話だが、大部分は草棚、廢船の中に持込まれて、人間の食料となる。

上海には包飯と稱する仕出し辨當屋が商店街を廻つてゐる。晝晩の二食で一人前に付一ヶ月二三圓位で、二人前以上を引受け、最低肉野菜魚玉子取交ぜ四品位の菜が付く。人數が殖えると原料が上等になり、一人を增す每に一碗を添ふ。飯はおハチの中に入れて來るが、此殘り物は習慣上、貧民が取得權と先取權を握つてゐる。午後食事が濟んで包飯運搬人が道具をかつぎ出すと、空罐を持つて往來にうろ付いてゐる貧民は、眼早く之れを認めて殘物を容赦なく搔ツ拂

つてゆく。包飯人は彼等のなすがまゝに任せ、天秤を卸して傍觀してゐるが、店へ歸つて來た時には、幾つものおハチの中には一粒の飯もなく、數ある井の中には、一滴の汁も殘さぬほどキレイに掃除されて仕舞ふ。北平（ペーピン）の糠餅も之れと同樣なもので、屋臺の上に殘つた冷めた糠餅は貧民の掠奪に任せる。之れは一種の道德的慈善心から起つた習慣であると或人が語つた。

まことに貧民のゐる處には何一つ費がない。往來に投げ棄てた卷煙草の吸殼を拾つてゐる者がある。上海は煙草が安いので、日本のやうに吸口など付けて丁寧に吸つてる者は殆んどない。大抵兩切をヂカに口に當てゝ半分ほど火が來ると捨てゝ仕舞ふ。それを側から拾ひ集め五合ほど貯めると六錢位になる。一日一人が二升ほど集めると二十四五錢位の收入にはなると云ふ彼等の話だ。いづれ卷なほして一本賣の煙草の中に這入るのだらうと思ふ。

上等の茶館では茶殼を買つてゆく者がある。之れも乾し返して色を付け、下等の茶館で使ふのださうだ。冬になると芥溜の中から蜜柑の皮を專念に拾ひ出してゐる者がある。日本人の居住區域に尤も多く之れが出るので、朝の中に汚ない小僧がワンサと集まる。之れも一日二十錢位の收入にはなると云ふ。無論干して陳皮にするのだらうが、藥の材料や菓子の原料が芥溜の

欠

を出す。

草棚と廢船には戸口調査も手が屆かない。なぜと云ふに、晝間は一家擧つて前記のやうな拾ひ物に出掛け、晩になると燈火もつけないで寢て仕舞ふ。これが多い處では四五百軒もかたまつてゐるのだから堪まらない。怠け者の支那役人は、よく〳〵の事でなければ燈火を點けてまで取調べることもあるまいが、昨年太湖の大盜、太保阿書(アッシュー)の妹とその亭主が、浦東(プートン)の廢船の中に匿れてゐたのを首尾好く逮捕したのは、支那警察として近來の大出來であつた。阿書(アッシュー)の妹は王八妹(ワンパーメイ)と稱し、上海戰の時、無錫で內河汽船を襲擊し、十九路軍の交通處副長王玉山を射殺し、元、孫傳芳の參謀で、前上海兵工廠工長であつた孫振球から三十萬圓を强奪した豪か者である兄の阿書(アッシュー)は本名徐天雄と稱し、一昨年之れも上海で逮捕されたが、彼は極貧の農家に生れ、一度自殺を企てたが救はれて道士となり、後ち共產黨に加入し、北伐軍に從て功績を擧げ、共國兩黨分裂の後は、閻錫山に加勢して後方總司令となり、交通破壞工作や宣傳工作に力め、國民黨と鬪つたが失敗後、其部下二千名を率ゐて太湖に隱れ、澱山湖を中心に人質强盜をなし、フランス婦人を浚つて三萬圓の贖金を獲たのを手初めに、匪賊としてのあらゆる犯行を重ね、彼

欠

を尾け覘つてゐた水上署の探偵孫煥文を射殺し、又水上署長徐樸誠の暗殺を企てたが成らず、却て徐の爲に逮捕され、故郷閔行鎭で極刑を受けた。かう云ふ大立物が廢船の中に躲れてゐるのだから、中々油斷がならない。併し彼は貧農の出であつてみると想半に過ぐるものがあらう。

實際廢船や草棚の中にはピストル一挺と僅か十圓の報酬で、自分には何の關係もない者に對し殺人を引受ける者さへある。

秋の月の澄み渡つた一夜、老幼男女は廢船の中から拔け出して草原の上に團欒し、一碗の燒酎を廻し飲みにして、瓢を二つ切りにした柄杓の腹を叩いて間柏子を取り、毛々絲や十八摸を合唱してゐるところを見ると、いかにも呑氣さうで貧樂を甘んじてゐる風流人のやうに見えるが、一寸利に誘はれると火に誘はれたガソリンのやうに發火する。殺人をすれば死刑を免れないこと位は、いかに無智なる彼等と雖も知らぬ筈はない。知つてゐながら引受けるほど、それほど彼等の生活が行詰つてゐる。これは旅人の眼には見えないことで、原因は農村の荒廢にある。爰に聖陶氏の小品「多收了三五斗」を擧げて彼等の實情を見よう。

農民の窮狀

「萬盛米行」の前の河には村から漕ぎ出して來た傳馬船が縱横に並んでゐる。船の中には新米が一杯積込んであるので吃水が深くなり、舷側と舷側の間に菜ッ葉や芥屑が白泡を吹いて浮き上つてゐる。

階段の上はやうやく二三人の人が並んで通行出來るほどの街道筋で、萬盛米行が街道に添ふて大きな間口をひろげ、今その前に袋を負ふた驢馬の縱列が馬夫に逐はれてシヤン〳〵〳〵と鈴を鳴らしてゆく。

朝日は半透明の貝瓦を透して櫃臺の前面を照し、そこに舊氈帽を冠つた男等が影のやうに動いてゐるのを見た。

彼等は船を繫ぐとすぐに息をもつかず、櫃臺の前に來て、己れの運命を占つてゐるのだ。

玄米が五圓、粃付が三圓——番頭さんは面倒臭さうに答へた。

ゑゝ何ですつて、と舊氈帽の一群は己れの耳を疑つた。

六月には十三圓ぢやなかつたかネ。
十三圓とは云はん、十五圓でも買つたよ。
何だつてそんなにがら落がしたんだらう。
今を何時だと思ふのだ。各地の米が潮のやうに出廻つて來らあ。モウ二三日經つと又ウンと安くなるぜ。
舊氈帽の連中は全く呆れ返つて仕舞つた。今年は天氣も順調で蟲も付かず、仇花も咲かずに好く實つて、一畝で慥かに三五斗の增收はあつた。これでどうやら樂が出來ると思つたら、最後の慕は平年よりも却て惡い。
そんなら賣らずに置かう。持つて歸つて、積んどいた方が增しだ——癪に障つて思はずこんなことを云つた。
フン——番頭さんは笑つた。お前達が賣らずにゐても餓ゑ死する者はないョ。外國米や外國麥が何處へ行つても山のやうに積んであらあ。第一回の輸入が食ひ切れないうちに、第二回、第三回の船がしきりなしに這入つて來るわ。

外國米や外國麥の事情は、彼等に取つては餘り遠方過ぎて何のことだか解らないが、たつた今米を賣らぬと云つた言葉は慥かに無駄口だつた。彼等は米を賣らずにはゐられない。地主に納める年貢はどうする。雇人の給金はどうする。肥代も溜つてゐるし、今まで食ひ繋ぎの借金だつて少くはない。
そんなら范慕の處へ行かう——范慕の方ならいくらか增しだらうと皆そう思つた。
併し番頭さんは又一つせゝら笑つた。
范慕はもちろん、城內へ行つたつて同じこつた。之れは組合の公定相場だから此二日間動かすことは出來ない。玄米が五圓、籾付が三圓。
慕范へ持つて行つたところで、餘りいいこともなからうぜ、と仲間のうちには悲觀する者もあつた。——此處からあすこまで行くには關所を二つ越さにやならねえ。稅金がいくらかゝると思ふ。まさか向ふで出して呉れることもあんめえ。
番頭さん、お願ひだ。もう一寸買つて呉んねえ。
もう一寸？馬鹿を云へ。口で云へばもう一寸だが、乃公達は元手を出して商賣をしてゐるん

だぞ。もう一寸直を上げて見ねえ。只奉公だ。そんな馬鹿なことが出來るかえ。

でもあんまり安いからネ。私どもは夢にもそんな相場にならうとは思やしねえ。去年の相場が七圓五十錢で、今年の夏は十三圓にもなつた。いや番頭さんの話では十五圓にもなつたと云ふぢやねえか。だから私ども此秋は屹度八圓以上にはなると思つたんだ。それがたつた五圓とは餘りひどいや。

番頭さん、去年の直段で七圓五十錢として下すつてはどうでせう。

番頭さん、田を植ゑる者は全く可憐さうだよ。ほんの一寸少し同情して下さい。

もう一人の番頭さんは、此時にが〳〵しい顏をしてゐたが、口に咖へてゐた卷煙草の吸ひ餘しをいきなり往來に拋り出し、眼を剝き出して怒鳴つた。

安くていやなら賣らぬがいい。お前達は自分で勝手に持込んで來たんぢやないか。誰れが此處へ來て呉れと賴みましたか。管らぬことを云ふものぢやない。金はこちらの物だ。お前達の物を買はないで他の物を買ふ。向ふを見ろ。まだ二艘着いてゐるわ。

三つ四つの舊氈帽が又石段をあがつて來た。彼等の醬油色の顏には希望の光が滿ちてゐた。

彼等は先客のあとの方へ來てそつと立つた。破れ布衣の上に日が射した。——どんなもんだネ、今年の相場は。

いやもう話にならねえ。たつた五圓だとサ。

ゑゝそれや本當か——希望の光はシャボン玉のやうに消えた。

シャボン玉のやうに消えたが、船の中の米は賣らずにゐられなかつた。米屋には金があるし、破れ布衣のポケットにはどうしてもその金を入れる必要があつた。

米のよしあしや斗りの多寡を論爭したあとで、米は一俵々々艙口から出た。船體は次第に浮き上つて舷側に漂ふ菜ツ葉も芥屑も今はもう見えなくなつた。舊氈帽の一群は自分で作つた米を萬盛米行の倉庫の中に運び入れ、その代り若干の紙幣束を受取つた。

番頭さん、銀貨で下さい。袁世凱はありませんか——正味のお米を正味のお金に換へるのは當然のこつた。お紙幣では割引になるかもしれない。

百姓！——筆を手に挾んで算盤を彈ぢいてゐた男が眼鏡越しにさげすむ如く見た。——一圓のお紙幣は一圓に使へるんだよ。お前達のお金を一錢だつて胡魔化しやしない。內には銀など

は無い。お紙幣ばかりだヨ。

ぢや中國銀行に換えて下さい――模様を見ると中國銀行のお紙幣ではない。

フン……お前は中央銀行の紙幣を取らないと云ふんだナ。お役所に引張り出されるぞ。

紙幣を取らぬとお役所に引張り出される！そんなことはない筈だが、彼等は聞き糺さうともせずに、半信半疑で仲間の顔を見交はし、破れた布衣のポケトの中に入れる者もあり、胴亂の中に入れる者もあつた。

町中は何となく景氣付いて來た。

舊氈帽の連中はけふはいろ〳〵の目論見を以て町中に這入つた。

洗濯石鹸もキラしてゐる。一打ほど買つて行かう。マツチも十や二十買つたつてぢきに無くなつて仕舞ふ。石油も一罐買ふとずつと安い。村へ來る商人は小柄杓で一杯が銅貨十枚と云ふ馬鹿値だ。二三軒寄合つて一罐（ひとかん）買つて分けたら隨分安く付くものを……ショー・ウヰンドウの中にある更紗木綿は一尺たつた八錢五厘だ。女房はそれが欲しさにけふはわざ〳〵一緒に出て來たのだ。自分が幾尺、阿大（アター）が幾尺、阿二（アニー）が幾尺、みんな豫算の中にあつたのだ。その外、楕

圓形の手鏡も欲しい。眞白なタオルも入用だ。毛糸の帽子も一つは子供に買つてやりたい。今年のやうな當り年はしよつちうあるわけのものではない。一畝（もう）で三斗――五斗の增收だ。いつも緊縮ばかししてゐる此手を、たまにはウンと擴げてみたつて決して惡いことぢやない。地代も拂ひ借金も返し、無盡の掛金も滯りなく濟ましてまだ大分殘る筈だ。そう云ふ目算の下には魔法瓶さへも買ひたいと思つた。此奴は實に不思議な代物だ。火を起さないでも濟む。熱い湯を一遍入れて置くといつまでも冷めない。炭薪を使ふ七輪や竈と比べると天地の相違だ。

彼等はぶつ〳〵云ひながら萬盛米行を離れた時にはもう博奕に負けて賭場を出たのと同じやうなものだ。今度の負けはいくらであつたのだか、彼等は知らない。兎に角ポケトの中の紙幣は半枚無からうが一角無からうが、自分の物に違ひない。この上いくら足して勘定しなければならぬと云ふことも考へない。いづれみんなに話せば解ることだらうと思ふ。

負けは結局負けで、町中に入つて品物を買へば、借金が殖ゑるばかりだが、すぐに船を出して村へ歸つたところが格別いいこともないのだ。總じて品物の一部は實際なくてはならぬ必要品だ。そこで町中が繁昌した。

三人、五人と連れ立つて、短い影法師を引きながら、狹い道を通つて、米屋の猾いことなど罵りつゝ歩いた。女は臂に提籃を掛けて片手に子供の手を曳きながら兩側の店に眼を通した。セルロイドの人形や、美しく彩つたブリキの太鼓や喇叭などを見ると、子供は欲しがつて動かない。

坊や面白いよ。舶來の太鼓に舶來の喇叭、一つ買ひなよ、と店の者はいい氣になつて誘ひ掛ける。——トントントン——プープープー

タンタンタン——こんな丈夫な洗面器。一つが四貫で掛直無し。安いものだよ。買つてみな。

おい〳〵お百姓さん、此處にあるのが舶來の染金巾、けふは特別の大安賣で、一尺が只の八錢と五厘。切尺はたつぶり量つて三割増し、いくらでも切りますから一つお土産に持つてお歸んなさい。

萬源祥、大利、老福興などの手代は、中にも一段と馬力を掛けて「お百姓さん」を喚び掛け、元手も手間賃も捨てるやうな勢でお百姓さんの袖を引攫んで無理槍に引擦込んだ。彼等はけふこそお百姓さんの懐中が暖かいと見て取り、此機會をのがしてなるものか！

お百姓さんのお紙幣は、切詰めの豫算の中から一枚々々手代の手に渡つた。マツチや洗濯石鹸の如きは必要缺く可からざるもので、買はずに措くわけにもゆかないから、マア少し買つて置かう。石油一罐は直段が張過ぎて迚も手に負へない、やめて置かう。やつぱり銅貨十枚で小柄杓に一杯づゝ買ふより仕方がない。キレ地は二着分欲しかつたが一着分で濟ました。妻子の分を買ふ積りであつたが、子供の方だけにした。楕圓形の手鏡は手に取つてみたが、すぐに又元のウキンドウの中に納めた。毛糸の帽子は子供の頭にすつぽり嵌つたが、亭主から「買つちやならん」と叱られてすぐに取脱づして仕舞つた。

欲しいと思つた魔法瓶は一圓だか一圓五十錢だか、直段さへ聞かずに仕舞つた。若し矢鱈に買込んで行つたら、何はともあれ、白髮頭のお爺さんやお婆さんの御機嫌を損じ「今の若さにお前達はそんな贅澤な眞似をして、一圓も一圓五十仙も使ふやうでは一生卯辰が上がらない。乃公達を見ろ。何を使つてゐるか」そう云ふ小言が幕無しに出るかもしれない。併しいくら何と云つても子供の慾には敵はない。女どもは仕方なしに一番安い舶來人形をたうとう買つて仕舞つた。その人形は手も足も自由に曲り、立たせれば立つし、坐はらせれば坐る。擧手の禮さへ出來るのだから、大人でさへ不思議に思はずにはゐられない。村へ持つて行つて、よその子

供が見たら定めし欲しがることだらう。

「お百姓さん」はそれから又、酒屋へ行つて酒を沽ひ、煮賣屋へ行つて肉を買ひ、萬盛米行の前の船に戻つて來て、艫の方から漬物や豆腐汁を出して來て、舳の方で一杯飲み初めた。

女どもは艫の方で飯を焚き初めた。一しきり、此船からもあの船からも煙が濛々と立ち迷ひ、涙が飜れるほどくすぶつた。子供等は空船の中に跳び込んで轉つてみたり、或は又河面から何か引揚げておもちやにした。こんなことでも彼等に取つては云ふに云はれぬ樂しみだつた。

酒が廻つて來るとお喋舌りになり、識合ひの人も識合ひでない人も同一運命に落ち、同一の河中にかたまつてゐるのだから、皆々一家のやうに懇意になり、向ふで杯を擧げて何か云ふと、こちらで箸を卸して何か答へ、同意のことには合槍を打ち、不同意のことには首を搖る。

一擔五圓とは丸で嘘のやうな話だネ。

去年は水災で收穫がなくて元を食つたが、今年は豊年で收穫があつてさへ元を食ふのだ。

今年の損は大きいぜ。去年はそれでも七圓五十錢には賣れた。

此調子だと自分の食扶持までも賣飛ばすことになるかもしれない。田を植ゑる者は全く、自分の作つた米を食ふことが出來ないものだナ。

なぜ賣飛ばすの。箆棒な。わたしやどうしても家の中に藏つて置く積りですよ。女房子供に食はせるのは當りまへぢやありませんか。わたしやいつそお役所に突出されてモツソー飯を食つた方が增しだ。

年貢を納めないではゐられないよ。納めなければすぐに借りになる。借りたら最後、四分も五分も利子が付いて來年になつて御覽、大變なことになつて仕舞ふ。

ほんとに田植ゑなどするものぢやないわネ。

いつそ放つたらかして逃げ出すか。乃公はその方が却て氣樂だと思ふ。

放つたらかして逃げ出せば、借金もそのまゝだし、無盡も取放しで濟む。何とかしてみんなで一緒に逃げ出しませう。

そんなことを云つたつて駄目だ。家には何人ゐると思ふ。男も女も年寄も子供も。

でも上海に行つて職工になれば大丈夫ですよ。家の村の小王も行つたぢやありませんか。上海に行つて職工になれば一個月十五圓の手間賃になります。十五圓あれば今の相場でお米が三

擔ある。

それや去年の暦を見るやうな話だぜ。上海も戰爭以來、工場と云ふ工場は、殆ど皆門を締めて仕舞つた。小王(シヨーワン)は此頃は乞食をしてゐるさうだが、お前、未だ聞かないのか。

一寸話がとぎれた。醬油色の顏はいよ〳〵濃厚になつた。醉が廻つて來た上に夕日を受けたからだ。

乃公達は年々田を植ゑてゐるが、一體、それは誰の爲なんだらう——酒を一口嘗めて疑問を發した者がある。

すると一人は萬盛米行の半新半舊の金文字の看板をゆびさし、

おい前を見な。乃公達は彼奴等の爲に働いてゐるのだ。散々腹働いて利子を拂ひ、借金まで して作上げたお米も、彼奴等が唇一つ動かすと、「一擔五圓」で乃公達の油水はキレイに吸取られて仕舞ふのだ。

だから乃公達の方で直段をきめてやればいいのだ。一擔八圓取れば決して不足はねえ。

何を馬鹿なことを云やがる。今、彼奴等の話を聞いたばかしぢやねえか。米屋は元手を出して商賣してゐるんだ。只奉公は出來ねえと云つたぢやねえか。

そんなら乃公達だつて元手を使つて田を植ゑてゐるのだ。何だつて彼奴等のために、又地主のために、只奉公してゐるのだらう。

乃公はさつき、倉庫の中でつく〴〵そう思つた。今は仕方がねえ。安く賣つて此處へ入れといてやるが、いまにお米が無くなつたら、乃公達は此處に食ひに來るぞ——一人は急に聲を落して河岸倉の方を眺めた。

そうだとも、いよ〳〵無くなれば、あるものを食ふ分には罪にならねえ。

今年の春、豊橋(フオンジヨオ)で米騒動がおッ初まつたさうだな。

保衛團が鐵砲をぶつぱなして二人殺した。

此邊でもいづれそんなことがおッぱじまるだらうヨ。

手ん手に勝手なことを云つて、酒を飲み飯を食つて仕舞ふと、思ひ〳〵に船出して鄉村に歸つた。船着場の前の河は廣くなつて暗綠色の汚水に暮れた。

次の日も亦同じやうな船が來て、同じやうなことをして鄉村に歸つた。

此小品には農村崩壞の種々相が累々と盛られてゐる。豊年も凶年も農民に對して惡いのは同じことだ。豊年には外國農産品のダンピングがあるから安い上にも安くなる。商人は又そこを附込んで投機的に引下げるから堪まつたものぢやない。金融機關の缺點は農民をして夏期には高い米を買つて食ひ、秋收後には自分の作つた安い米を賣らなければならなくなる。政府の苛稅と地所の直上りは地代を引上げ、釐金稅の如き惡稅も未だに廢止されてゐないのだから、少し先きの城内に持込むことも出來ないので、見す〳〵買叩かれるとは知りながら、手近の町で捌いて仕舞ふ。商人の方には金がある。農民の方には金がない。賣手の弱いのは當然だ。その上又安い紙幣を押付けられて二重にも三重にも損をする。

手工業は外國の機械製品に押されて農家では副業を失つて仕舞つた。米野菜以外の日用品は凡て現金を以て買はなければならない。其金は何處にあるか？　地代、肥料代、傭工の手間賃無盡其他の借金を差引くと、何も殘らない丈けならまだいいが、負債となつて來年に持越し、それに又笵棒な高利が着く。これぢや全く聖人の教へぢやないが「民、手足を措く所無し」で、苦し紛れに大都會に出て、職工にでもならうと思ふが、職工は多少ながら技術の修養を要するし、力業は都會にはあり餘つてゐるので、俄に容れる餘地がない。況して一家を擧げて移住することなど容易なことではない。廢船生活と草棚生活の背景には、斯の如き悲慘事が過去に尾を引いてゐる。

昭和三年頃、五百人ほどの飢民團が上海附近の寶山縣を通過したことがある。老若男女が鍋釜鋤鍬寢道具を持つて押寄せ、縣の古廟に一夜を宿したので、暴動でも起されては大變と、縣でも警戒し若干の金を與へて他所に移動させた。餘程遠國から來たものと見え、言葉も通ぜず、何の爲に避難して來たか、それさへ解らぬうちに何處へか消えて仕舞つた。彼等は未開拓地を捜すつもりで彷徨ひ出たのであらうが、此邊にはそう云ふところはなし、恐らく浙江福建の國境へでも入込んで武陵桃源の故事を學ぶか、或はみち〳〵女子供を賣飛ばし、丈夫な男だけ殘つて匪賊の群に投じるより外はなからう。

飢民が上海に集る原因は先づ此位にして次に裏店生活を說く。

裏店生活は草棚生活と違つて何しろ家賃の費る家に住んでゐるのである。一番安いところで家賃三圓位、これは舊支那家屋の平家建だが、追々撤廢されて今は殆ど少い。新規に建てるものは間口二間、奥行二間半位の二階建で、家賃は八圓位である。

貧民に八圓の家賃は中々の重擔だが、そこはよくしたもので、比較的餘裕のある者が、先づ大家から借受け、これを幾間にか仕切つて又貸をするので、銘々二三圓の家賃で濟む。又貸する者は二房東（アルファントン）と稱し、自分は家賃の上前を撥ねて只で住むか、或はいくらか儲け出して暮しの足しにする。之れは貧民ばかりではない。上海では中流生活をする者が皆此形式で居住費を節約する。併し中流社會は二階全部を貸して自分は下に住むか、少くとも一間々々を日本のアパート式に貸してゐるが、貧民はそれ以上の節約法を考へてゐる。彼等は一つの部屋を二つにも三つにも仕切つて住む。仕切は破目板ではない。アンペラ織の筵（たかむしろ）を無細工に張り渡して隔壁の代りとする。最も奇異に感ずるのは、天井の高いのを幸に棚を作つて棚の上を貸す。平面的に仕切るのみならず立體的にも仕切るのである。これは汽船の三等室から思付いたのであらう。下等の木賃宿は三等室と殆ど變りがなく、入口から奥まで狹い通路を殘して、お蔓棚が續いてゐる。だから家賃の高い便利な場所で一晩六錢位で泊めることが出來るのである。

普通の住居はそれほどでもない。併し何しろ狹い。狹い所に寢臺を据ゑ、食卓を置き腰掛を置く。壁の破れには新聞紙を貼る。裝飾は美人畫のカレンダー、電燈のないところはブリキ製の三十錢の美孚ランプで間に合はせる。

裏口の無い路次住まひは物干場がないから、向ふの軒へ竿を渡し掛け、洗濯物を通路の上に干す。夏になると、此洗濯物が層々相重なつて奥へ奥へと續き、頭の上からぽた〳〵露が落ち、敷石は始終じく〳〵してゐる。向ふの女房とこちらの女房は、そういふところで井戸端會議をしてゐる。彼女や彼女の子供は、部屋の中に引込んでゐることは滅多にない。雨降りか、阿片か、麻雀か、そんな時には通風のない狹い闇い部屋の中でも我慢するが、たいていの場合、外に出てゐる方がよつぽど氣持がいいからである。

かういふ生活樣式には、種々の派生的、補足的機關がそなはつて不便を補ふ。

湯を沸かして賣る店、老虎竈（ローフーゾー）もその一つである。彼等はお茶が飲みたくなると土瓶を提げてゆき、顏を洗ふ時には洗面器を持つてゆく。行水や洗濯で湯を要する時には、一手桶注文する

と先方から運搬無料で送り屆ける。

老虎竈は百戸に一戸位の割合で何處にもあるが、オガ屑を燃料とするので經費が安く付き、土瓶に一杯位の湯は、現在三厘位に當る銅貨一枚でも多過ぎるので、木札のお剩りが何枚も戻つて來る。此店の一方には卓子と腰掛を置き、粗末な茶飲場所になつてゐる。即ち最下級の茶館である。男は朝起きると顏も洗はず茶館に行き、ボーイの持出す熱いタオルで顏を拭き、お茶を一つ註文して、そこに賣りに來る、或は店先きで燒いてゐる燒餅（シヨーピン）や油條（ユーテヤー）などを買つて簡單に腹拵へをする。これで朝の仕度は濟んで、それ〴〵稼業の方面に出向く。或はそこにゐのこつて顏見識の常連と世間話をして晝頃まで愚圖々々してゐる者もある。彼等は字を讀む者が少いから口から耳に話を聽いて世間の事情を知る。戰爭とか罷業とか、銀行紙幣の不渡とか、利害關係の密接な話は案外早くから云ふ處に傳はる。

大きな茶館は午前中商人の取引場に用ゐ、午後は遊覽客や閑人の休息場になる。此處には物賣が盛んに出入する。烟草とか飴菓子とか煎豆とか雜貨とかあらゆる物を賣りに來る。みんな賣つたつていくらにもなりはしまいと思はるゝほどささやかな商品を抱へて、萬遍なく廻つて

ゐる。茶館は次から次へとあるから、彼等の販賣區域は中々廣いものだ。かう云ふ物賣は皆貧民窟から出て來て、家では前記のやうな生活をしてゐるのである。

茶館ばかりではない。往來にも溢れるほど物賣がゐる。何しろ人の集る市場とか、目拔の場所へゆかなければ物が賣れない。そう云ふところへ荷を卸したり、店を張つたりすることは勿論ゆるされないから、巡廻巡査のあとへ廻つて物を賣る。そうして次の巡査の顏が見えると、忽ち路次の中に引込んで仕舞ふ。だから巡査の前面はいつもキレイに片附いてゐるが、一度その後ろを見ると、往來の邪魔物が縱出横陳し、玩具箱をひつくりかへしたやうな騷ぎである。物賣の多いことは貧民の多いことを裏書するもので、彼等は蜘蛛が巢を張るやうに本能的にどこへでも店を張る。大道に面した商店の一部に隙間があつたら、そこにはもう床店が詰めてゐる。たとへば茶館の階下の三尺の軒先に燒饅頭を作つて賣つてる者や、酒屋の店の片隅に鷄、家鴨の切賣してゐる者がある。路次口の片隅には燒栗、燒芋、こわ飯屋が出てゐる。戸締のしてある空店の前には、一尺の階段に添ふて古本屋が宮守のやうに密着いてゐる。燒跡の空地には忽ち買藝人が集り、手品をしたり、器械體操をしたり、覗眼鏡（のぞきめがね）や操人形（あやつり）や犬と猿の藝や、簡

單な野芝居までも演じる。しかしそれが昨日あつたかと思ふと、今日は何一つ無かつたり、まことに人生行旅の如し、行當りばつたりと云ふのが彼等の生活である。

賣藝人は所謂江北と稱する江蘇東境の鳳陽縣の者が多い。打花鼓は犬猿の藝や野芝居を演ずる一座である。又青龍刀や長槍を振廻して武藝を演ずる者もある。尤も穢な藝は蛇を口に入れて喉から鼻へ出す。彼等は不毛の地に住むので不足を補ふため、毎年一定の季節に一家揃ふて出稼ぎをするのである。藝のない者は研師になり、女房は手製の太白飴などを賣りに出る。飴屋は鐵片を叩くが、研師は布れ聲を出す。其布れ聲が郭公の聲に似てゐるのも妙だ。同地方には郭公が多く、路傍の柳の樹などに矢鱈に啼いてゐるので、知らず〳〵其聲が移つたのであらう。曇つた日の街頭のシヤツタ、ムチンタオと云ふ聲は、村落の木影を走るカツコン〳〵の聲に殆ど違ひがない。

物賣は季節に應じて變更するものと變更せぬものとある。水菓子賣などは四季折々變ることは商品の性質として無理もないことである。蜜柑、杏子、梨、柿、バナナは別問題として近隣の山澤から百姓が持出して來たものを擧げると、春は園ひもの〻菱（蒸物）、夏は地栗（くろくわゐ）藕（蓮根）、いづれも生で食ふ。秋は白果（燒銀杏）冬は青果（生檳榔）と移り變る。

桶の上に襤褸着物を掛けて、その中から蒸返しの眞黑になつた菱の實を出すのは餘り感心しない。食べるとアセチリン瓦斯臭味のある屁が盛に發散する。併しこれも春の風物の一つだ。めつきり熱くなつて單衣物でも着ようと思ふ頃、「オー香的、地栗阿、軟的地栗阿、デリリオ、デリリオ」と云ふ聲が聞える。晝間の熱さに秋立つことを忘れてゐると、「オー熱白果、熱白果、一個銅幣十二個」などと云ふ聲が聞えて、やつぱり凌ぎ好くなりましたネと云ふ言葉が交される。外套が必要になると橄欖の青い實が街頭に現はれる。

西瓜子、花生米（南京豆の中身）は年百年中あるもので、物賣としては尤も初歩の品物、仕入れも十錢か二十錢で濟み、子供や老人の內職である。

油條――米利堅粉の油揚も亦老人の內職である。これは貧民には朝夕なくてはならぬもので、お粥の相手にしたり、餅やこわ飯に包んで食ふ。その外豬油糕、發糕などといふものは皆朝の貧民窟を賑はすものである。

日本の夜泣うどんに該當するのがワンタン屋である。近頃は日本でも同じやうになつて仕舞

つた。又昔の甘酒屋を思はせるのが粥賣である。「白糖蓮心粥（パタンレンシンチヨ）、熱好赤豆湯（ニヤーホ ツアデタン）」と節を付けて賣り歩く。上海ワンタンは馬形の大きな竹屋臺をかついで梆子（パンツ）（竹筒の腹）を叩く。廣東ワンタンは平屋臺で間い竹片を叩く。竹片を叩く者が別に一人附いてゐる。ワンタンメーンと聲を引いて叫ぶのが如何にも悲しげなカン聲である。これこそ本當に夜泣ワンタンだ。又煮團子を賣歩く者がある。これもトトトトと竹筒を叩く。かういふ稼業をする者は餘程の細民と見え、戰爭のさなかでも賣聲を上げる。

日本のやうな生豆腐賣はないが、その代り豆腐腦と云ふ半凝りの豆腐にダシ醬油を掛けて賣る。腐つた豆腐を豆油で揚げたものを臭豆腐干（ツデフケー）と云ひ、迚も鼻持のならぬものだが、上海人は餘程の好物と見え、夏冬を通して賣られる。又白瀧にキンカン揚、堅作の豆腐の煮込、或は唐辛子味噌を掛けたもの。

肉のアラ煮は臓腑を丸ごと鍋に入れ、迚もぶざまのものであるが、何しろ飯付六錢で腹一杯にしようとするにはどんなものでも食はなければならぬ。それでも三度食へば三六の十八錢、木賃に泊つて又六錢、茶館で間食して又、六錢、一日三十錢はどうしても稼ぎ出さなければな

らぬ。彼等としてそれだけ稼ぎ出すには非常な勞働をしなければならぬから、コソ泥の絶えないのは當然である。

見掛は悪いが荷揚人足などは、一種のギルト組織で親方の下に統率されてゐるから、暮しが割合に安全である。その證據には彼等の悪事が新聞に出ることが少い。土工も掃除夫も同樣と見て差支えなからう、尤も穢い糞浚ひが尤も身入のいい事は何處でも同じである。

荷物運搬夫即ち小車夫（シヨーツオーフ）は割合に手堅い。車はたいてい自分持でそれを操縱するコツがあるから、風來者には一寸手が出せない。時によると百貫以上もある重い荷物を振別けに積み、鑑札を腰にぶらさげ、腰で調子を取りながら兩手を伸ばして一輪車を押してゆくことは容易な業ではない。

尤も氣の毒なのは人力車夫だ。曾ては一萬二千臺の貸車があつて車夫は二萬人に餘つたが、交通事故が頻繁にあるので、工部局では年々に耗し、昨今四千臺にまで切詰めた。現在猶ほ一萬二千の車夫が殘存し、車と車夫とは三對一の比例で、賃代も以前六十仙のものが一圓以上にあがつた。考へて見給へ、銅貨の安い今日一圓以上稼ぎ出すのは容易なことではない。その上

往來でまご〳〵してゐようものなら、交通妨害の廉で忽ち鑑札を取上げられる。鑑札は一區域三ヶ月一圓五十錢で車主の負擔だが、巡査に取揚げられた時には車夫は辨償しなければならぬ。悲しむべき負擔はそればかりではない。坐蒲團を盗られたり、雨具を盗られたりして、例の泥棒市へ行つて、安く買戻すこともあるが、買戻すことが出來なければ借金になる。それでも外國水兵上陸の際には忽ち息を吹返し、齒代を差引いても二圓三圓を餘すことがあるので彼等は結局だらしがない。彼等は馬の如うに馳け出すことに依て身體を痛め、身體を痛めることに依つて阿片を喫み賭博に耽る。賭博に耽ることに依て飯を賭け、女房のあるものは女房を賭け、母親のある者は母親を賭けるのだから大抵驚く。

或女房持の車夫が獨身者の車夫から金を借りた。期限が來ても中々返すことが出來ないので八釜しく催促され、「では女房の處へ行つて取つて呉れ」と云ふ。そこで獨身者の車夫は亭主の留守中女房に會つて返金を迫ると、今一文も持合せがないと云ふので、そんなら金の代りにと或る條件を持込んだ。女房は仕方なしにそれに應じた。

これに就て寧波人の典妻を想出す。或富翁が老いて子がないと貧民から妻を借入れる。大てい二三年の契約で何十圓と云ふ賃借料である。子を生めば妻を返す。期限が來て姙娠中だと生むまで待つのが契約だ。

又童養媳（ドンヤンシー）と云ふことがある。乳飲兒に對し、將來其兒の嫁にする目的を以て、五六歳の娘を買入れ、子守をさせたり、煮炊きや洗濯を命じ、子供が成人の後ち初めて夫婦の關係を結ぶ。だから女が男より年長の夫婦は大概童養媳である。右はいづれも家長專制の現はれで、子供のためよりも家のためを思つてゐるのである。凡そ夫婦の關係を結ぶものは金錢で義理を生じ、一緒になれば愛情を生じ、子供が出來れば容易に離れることが出來ない。許婚の時、女家は男から手附を取り結婚の時には禮金を取る。たとひ乞食同士の結婚でも只で妻を持つことは出來ない。だから妻を借したり賣つたりする理由もある。但し現代のインテリは別問題で、此處では舊慣を固く守つてゐる下層階級を云ふのである。

地方人の多く集る上海には獨身者が多い。獨身者に對しては自然笑を賣る者が生じ、相手と同じやうな生活形態の段階を作る。掉老鼠（チョウロースー）、釘棚（アンポン）、花煙間（ホイケ）等は上海最下級の娼家で、苦力、車夫、田舍の哥さん等を顧客とする。

掉老鼠は鼠が跳ねると云ふことで、之れは最初黑暗で行はれ、値段は六十文だつた。六十文は明末から清朝へ掛けて一家一日の最低生活費であつたが、爾來老鼠の値段は版に刷つたやうに規まり、開港以來物價は上つても之れぱかりは上らない。傳說には、明の遺臣が生活に窮し晦日の闇に乘じて路傍に店を張り、家財道具を持出して賣拂つた。買手は手探りでいい加減に値踏みをして買つてみると、ときたま篦棒な掘出し物があつて大評判になり、毎月其夜を黑市と稱し諸方から人が集つた。或遺臣は何もかも賣盡して仕舞ひ遂に妻妾の顏を包んで市に連れ出し、掉老鼠に依て六十文を得、やうやく露命を繋いだと云ふ。

右は夜鷹の一種で又露水夫妻とも云ふ。

釘棚は最下級の娼家である。北方の勞働者は釘を打つと言ふ言葉を使つてゐるが、何をすることだか、程よく想像して貰ひたい。釘棚は其打釘子が行はれる小屋である。値段は初め穴錢六十枚であつたが、後ち百二十枚に直を上げ、そうしていつも五枚位負けたので一百十五と云ふ。一百十五は一種の惡口として通用される。×××××暗合とは云ひながら、彼女等は常に一百十五に惱まされてゐるのである。

此種の店は內地通ひの民船の着く枝河の附近、或は市場の間近にあつて、客種は船頭さんや、市場の苦力、小商人などである。南市の小東門、十六舖地方は昔から有名なところで今も盛んに繁昌してゐる。

花煙間　上海開港以來、阿片吸食所——煙館と云ふものが設立され、高等の煙館は二層、三層の大樓で茶館を兼業し、四馬路の茶館青蓮閣、四海昇平樓など其遺蹟として珍重されたが、改築後それさへ影を沒し跡方もなくなつた。花煙間は煙館の極めて下等なもので五馬路以南に散在し、間口二間、奥行二間半ほどの二階建の小屋である。此種の家は上海最古の形式で入口に向つて楷子段を設け、楷子段の下にもベッドが二つ三つ置いてあり、扉はいつも半開きで客が來ると下で應待し、話を規めて二階へ連れてゆく。込み合つた時には戸を閉めて裏口から出入し下で用を足す。二階は二間位でベッドや匠などを置き、最初は阿片だけ吸はせたものだが、世話役が必要になり若い女を置いた。客種は重に公館の小使や馬丁などで、旦那の茶屋遊びの供をして來た者が一刻の暇を偸んで無駄話をするところであつた。女も看板娘だから一軒に一人かそこらで、狹いところで多くの客を綾なすのだから並大抵なことではない。從て勇み肌で

舌鋒が鋭く、女だてらに隨分喧嘩の賣り買ひもした。明治二十四年頃の著作「海上花」には此種の店の消息が詳しく記されてある。ところが大正二年、わたしが初めて上海に行つた頃には、煙館は廢されて、老闆（ローボン）（樓主）は營業の持續法として四五名の田舍娘を買入れ買春を專業とした。煙館と云ふ名目は禁止されたが、阿片は平氣で喫ませてゐた。

着物は夏も冬も水色木綿の單衣で、冬はそれを上つぱりにしてゐるが、いくら下等でも賣物だけに小洒落りした物を着てゐた。化粧は大時代で眼のふちを紅で暈し、白粉をコテ〳〵塗つた者が多い。現在それが殆ど斷髮になつたんだから變れば變るものである。

彼等は稼ぎ高の全部を老闆（ローボン）に奪はれ、食事も碌々配てがはれず、內職に鞋底（くつぞこ）など縫つて小遣錢を作る始末である。ときたま情け深い客が五十錢、一圓の小遣錢をやると、それさへ老闆（ローボン）に取られて仕舞ふ有樣だから全く浮ぶ瀨がない。肉體の虐使と饑餓と折檻と病毒の浸入のために、神經が麻痺し、喜怒哀樂の發動が鈍く、自分の一生の動向を凡て苦命（クーミン）と諦めてゐる。

苦命（クーミン）は子飼ひから育てた者の生年月日時を老闆（ローボン）が勝手に變更して尤も惡い干支の下に置く。迷信深い彼女等は星卜者に見て貰ふと、一生苦海のドン底にゐると云ふ。之れは原本が同じだから誰れに見て貰つても一定してゐるので、彼女はすつかり信じて仕舞ふ。

店は小東門（シヨートンメン）、十六舖（シーラツプー）、鄭家木橋（ヂヤンヂヤモヂヨオ）、打狗橋（ターヤウヂヨオ）……邊に集つてゐるので、それが又惡口の語源になる。自分が大正二年採集した土方歌に左の如な文句がある。

ゑーやーあいよー。よわ、よわ、ハンナ。ややう、ハンナ。ぴらふ、ハンナ。しよとんめん、ハンナ。しつらつぷ、ハンナ。あ、ねーんこねーり、ハンナ。

▼ゑいやーあいよう——掛聲▼也也伍（ヤヤウー）——馬鹿々々しい▼披拉虎（ピラフー）——見掛倒し。女郎のおめかしを譏る▼小東門（シヨウトンメン）、十六舖（シウラツプ）——娼家の所在地即ち女郎を指す▼念個二厘（ネンコーリ）——二十二文。女郎を罵つて二錢二厘だといふのである。▼砵那（ヘンナ）——砵（ヘン）は地均し棒。突き固める事。

此種の娼妓は上海開港直後同治年間には二百餘名に過ぎなかつたが、大正七年の調査に據ると千百餘名に上つてゐる。現在は勞銀も上り、勞働者の生活も向上して大多數は野鷄（ヤーチー）の方に足を向けるが、最下層の苦力車夫などは相變らずかう云ふところで若い元氣をxらしてゐる。

インテリの間借生活

間代が三十圓も五十圓もするアパートの中にも貧乏人がゐる。凡そ貯金のない者は皆貧乏人と云つて差支えなからう。失業すればあすから困る。病氣すれば藥代がない。インテリゲンチヤの貧乏人は大抵間借生活をしてゐる。同じやうな門が一列に並んだ路次内の比較的清潔な住宅區域に「召租房間」と云ふ紅紙の貼つてある處を覓めて彼等の住家とする。そこには魯迅の「傷逝」のやうな自由結婚の夢破れつゝある者もある。又「孤獨者」のやうな一特色がある爲に、却て衆俗から排斥さるゝ偏狹者もある。郁達夫の作品のやうないつも生活におびえてゐる貧乏文士もある。時代思潮に感じ社會の變革を企てる思想家もある。時の政府に反抗して始終世を忍ぶ革命家もゐる。大凡そ今日の支那ほど不平家の多く集つてることはない。外國に留學して歸つて來ると、皆革命家になる。故郷に歸れば田園は荒れてゐる。軍閥は戰つてゐる。農民は飢餓に瀕してゐる。都會に出れば買辦が國を賣つてゐる。新興ブルヂョア、高利貸の類が驕慢奢侈を縱にしてゐる。經濟機關の不均等の發達のために彼等新智識を用ゆるところがない。生活難は犇々と迫つて來る。革命的思想が病的に變形して只もう世を呪ろひ人を怨み、革命の爲めの革命、破壞のための破壞あるのみ。

欠

欠

終

昭和九年八月一日印刷
昭和九年八月五日發行

上海の貧民相
定價金三十錢

東京市豐島區池袋三丁目千二百五十八番地
編輯兼發行者　磯部榮一

東京市芝區南佐久間町一丁目七番地
印刷者　岩本菊雄

東京市芝區南佐久間町一丁目七番地
印刷所　研文社

不許複製

東京市豐島區池袋三丁目千二百五十八番地
發行所　東亞研究會
振替東京五八九二九番